

# 「木の上の軍隊」のモデルは私の父でした

沖縄・伊江島

太平洋戦争末期の沖縄で、終戦を知らず約2年間、ガジュマルの木の上で生き抜いた日本兵2人の実話に基づく「木の上の軍隊」(※)。「兵士のひとり佐次田秀順は、私の父です」と、うるま支部の藤木京子さんから編集部へ手紙が届きました。藤木さんを訪ね、お話を聞きました。

## 隠れた木の上

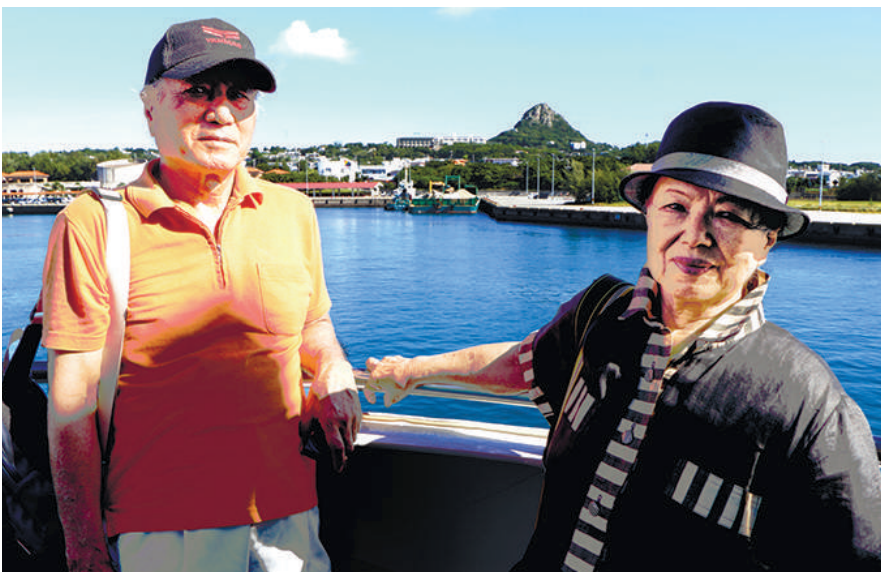
「父が登っていたガジュマルの木は、2年前の台風で倒れてしまいました。でもほら、残った木の枝を植えたところから新しい葉が。京子さんと弟の佐次田満さんが案内してくれたのは、伊江島

・西江前区にあるニバンガジュマル。伊江港から車で5分程、サトウキビやらっきょうの畑、ハイビスカスの花が咲く中を走って着いた、民家(宮城家)の敷地内にありました。

## 生きるために

映画や演劇では、上官と新兵との意見の対立が描かれますが、実際は2

※「木の上の軍隊」こまつ座「戦後『命、の三部作』のひとつに位置づけられる舞台。井上ひさしの原案を元に、蓬萊竜太作・栗山民也演出で2013年に初演され、2人の存在が世に知られるきっかけとなった。戦後80年の今年、沖縄出身の平一紘監督により映画化。



藤木京子さん(83)と佐次田満さん。伊江島に向かうフェリーの上で



伊江島を再訪したニバンガジュマルに登った佐次田秀順さん。ニバンとは宮城家の屋号。2年前に倒れた木の枝から楽器をつくり、今年は平和コンサートも開かれた



人に上下関係はなく、生きるのに必死で助け合っ

たと言います。ともに逃げていた仲間の兵は銃弾に倒れ、「1人でも生きろ」と言い残し、亡くなりました。木の上でマリリアや破傷風にかかるなど何度も生死をさまよいました。夜になると、戦争になる前の地元での祭り

## 住民が戻って

砂糖をつくる話など、繰り返し話しました。秀順さんはこの時結婚しており、京子さんがすでに生まれていました。

片目が見えず兵役を免れていましたが、終戦直前に臨時召集されたのです。京子さんが話します。「私たちは沖縄中部の石川に住んでいました。父は樹上での生活の間、妻



映画の舞台となったガジュマルの木は、ミースイ公園に移植されたもの

と子が無事であるようにと、沖縄本島へ向かって毎日手を合わせたそうです。私が覚えているのは、庭で遊んでいると突然、目の前に軍靴が現れたこと。それから父は、私を抱き上げてくれたそうです。兄・勉が5歳、私が3歳のときでした」

## 戦後ではない

直、和美と3人が生まれ、5人となった子どもたちに、秀順さんは伝え続けたそうです。「戦争が始まれば、人間は鬼になる。1人では勝てない。見つければ殺される。逃げ続けなければならぬ」。だから絶対に戦争はしてはいけないと、子々孫々まで言い伝えてほしいと。

## まだ

たった6日間で制圧された伊江島では、生き残った住民は慶良間諸島に送られ、2年間自分の島に戻る事ができませんでした。住民が戻って初めて2人は戦争が終わったことを知ったのです。家族の待つ石川へ帰ったあと、秀順さんは、農業や好きな牛の世話しながら暮らし話をしてもらいました。それから満

た。昨年、伊江島での映画ロケのためにガジュマルの木を掘り返すと、沖縄戦の犠牲者と思われる遺骨が20体出てきました。満さんは「沖縄はまだ戦後ではない。父が亡くなった時、足から銃弾が出てきた。一人ひとりが戦争を抱え、死ぬ時になってその人の戦争が終わる」と言います。

伊江島で最後に訪れたのは、沖縄に伝わる言葉「命どま」の家。その言葉の意味を改めて感じながら、島をあとにしました。



倒れた木の枝から実も

(月1回)

## 旬レシピ

### サンマの湯煮ネギおろしだれ

管理栄養士・料理家 金丸絵里加



1人分284kcal、塩分1.8g

## 文化情報

### 美術

1950年代から60年代にかけて、日本では短期間、女性作家が前衛美術の領域で大きな注目を集めた。新しい時代の象徴になるはず

### 「アンチ・アクション」彼女たち、それぞれの応答と挑戦

が、伝統的なジェンダー秩序の揺り戻しが生じると批評対象から外され、歴史から姿を消す。こうした経緯に対抗したのが「アンチ・アクション」という言葉だ。本展では、草間彌生、田中敦子など14人の女性作家の作品120点を展示。ジェンダー研究の視点から美術史の読み直しを図る。



山崎つる子「命どま」1963年 兵庫県立美術館蔵(山村コレクション) ©Estate of Tsuruiko Yamazaki courtesy of LADS Gallery, Osaka and Take Ninagawa, Tokyo

■～11月30日(日) / 愛知・豊田市美術館 / 10時～17時半(最終入場17時) / 月曜日休館(11/3、11/24は開館) / 一般1500円他

## 編集部から

8面の藤木さんは、「父が戻るまで、母は小さな兄と私を連れて生き延びねばならなかった」と。まだまだ知らない沖縄の歴史と現実、多くのことがある。今後も紙面で伝え続けたい。(佳)